

タイトル	自殺観の二面性と自死遺族に対する態度との関連
著者	山中，亮；Yamanaka, Akira
引用	北海学園大学経営論集，15(3)：61-69
発行日	2018-03-25

自殺観の二面性と自死遺族に対する態度との関連

山 中 亮

日本の自殺者数は1998年以降14年続けて3万人を超える状態が続いてきた。2006年には、こうした自殺の深刻な状況への対応として自殺対策基本法が施行され、様々な自殺対策が講じられた。その結果2012年に自殺者数は3万人を下回り、2016年には2万1,897人と減少傾向にある（厚生労働省, 2017）。しかし自殺死亡率は諸外国と比較して依然高水準にある（厚生労働省, 2017）。

自殺対策基本法では、自殺対策を総合的に推進して自殺防止を図るとともに、自死遺族に対する支援を充実することの重要性が明記されている。自死遺族支援の必要性が強調される理由として、自死遺族は他の死別遺族に比べて周囲からの偏見が強く、周囲からの理解や支援が得られにくい状況に置かれていること（Jordan, 1999）、またそのような状況にあるために死別の悲嘆過程も複雑になりやすいこと（Rudestam, 1997）が指摘されている。

それでは自死遺族に対して周囲の人々はどうのような偏見を抱くのであろうか。Calhoun, Selby & Faulstich（1980）は、架空の子どもの自殺事例記事と病死事例記事の2種類を提示し、その親に対する態度を比較した。その結果、病死事例よりも自殺事例の親に対して好意の程度が低く、亡くなった責任をより強く求める傾向が示された。同様の研究ではさらに、自殺事例の親は精神的混乱が強い、悲しみや抑うつが長引く、羞恥心が強い、専門家のサポートが必要である、などとみなされる

傾向が見いだされた（Calhoun & Allen, 1991）。また遺族の立場が配偶者など他の立場においてもほぼ同様の傾向が示されている（Calhoun, Selby & Walton, 1986）。こうした周囲の態度は、自死遺族には強い否定的態度に感じられたり、場合によっては「自分は周囲から避けられている」という態度ととらえられるものもある。

自死遺族に対する偏見の形成メカニズムについてDoka（2002）は、自殺に対する否定的な態度が自殺既遂者への偏見につながるだけでなく、既遂者遺族に対しても広がることで形成されているのではないかと述べている。欧米では自殺に対する否定的態度が古くから存在しており、現代でもスティグマとして残存していると考えられている（Cvinar, 2005）。欧米諸国と比較して、我が国は自殺に対して比較的寛容な文化とされており（Pinguet, 1984 竹内訳, 2001）、自殺行為に対して否定的な態度は顕著ではないと考えられる。しかし、一方で自死遺族に対する否定的態度の存在が指摘されてもいる（藤井, 2009）。

Domino and Takahashi（1991）は、日米の医学部学生を対象とした自殺観に関する調査研究を行った。その結果、アメリカの医学部学生に比べて日本の医学部学生は、人には死ぬ権利があること、自殺は正常な行動であることより高く認識しており、逆に自殺が攻撃性や怒りを反映した行動であるという認識は低かった。さらに、個人的に自殺既遂した人を

知っている」と回答した者は、日本で 42%、アメリカで 45% とほぼ同程度であるにもかかわらず、それが家族・親戚・親友であったと回答した者は、日本で 15%、アメリカで 48% と大きく異なる割合が示された。この点について、張（2006）は、日本ではアメリカよりも親族の自殺を隠す傾向が強いのではないかと指摘している。日本では自殺を容認・称賛する態度がある一方で、身内の自殺を隠そうとするタブー視の態度が存在し、自殺観の二面性があるのではないかと述べている。この二面性について、自殺を容認・賞賛する態度は、自殺予防を消極的なものとしてしまう可能性があり、一方タブー視は効果的な自殺対策を検討するのに必要な自殺の実態を覆い隠してしまう危険性があると考えられ、二面性の存在が自殺予防の推進を妨げると指摘している（張, 2006）。一方自死遺族支援の観点からすると、この二面性の存在によって、自殺を容認するという一見肯定的な態度がありながら、タブー視する傾向があるため、自死遺族に対しては結果として否定的態度が向けられるのではないかと考えられる。このように考えると、我が国においても自殺のタブー視に端を発する自死遺族への偏見が強く存在することは十分に考えられる。実際に自殺実態解析プロジェクトチームによる調査（2008）では、過半数の自死遺族が自殺に対する偏見に基づいた言動を周囲の人々からとられた経験をしていることが明らかにされている。

そこで本研究では、日本の大学生を対象に自死遺族に対する態度へ自殺観がどのように影響を及ぼすのか、特に自殺の容認とタブー視という自殺観の二面性に注目して検討する。

なお自死遺族に対する態度測定に関して、自死遺族に関する架空の記事や事例を用いた研究では、主に Calhoun et al. (1980) の研究で用いられた質問項目が用いられることが多い。具体的には、遺族の精神的混乱の程度、遺族に対する好意の程度、遺族に死の責任を

求める程度、遺族が悲しみや抑うつを感じる期間、遺族と接する際の緊張の程度、そして遺族に対する共感の程度という 6 項目である。Reynolds & Cimbalic (1988-89) は、Calhoun et al. (1980) の質問項目のうち、精神的混乱の程度と類似していると考えられる、悲しみや抑うつを感じる期間の項目を除いた 5 項目を用いた。参加者の負担も考え、本研究でもこの 5 項目を用いることとする。

一方自死遺族に対する周囲の態度を包括的に測定するための質問紙も開発されている（Calhoun, Selby, Tedeschi & Davis, 1981; Spence, Goldney & Moffitt, 1984）。この質問紙では自死遺族に対する態度として、「自死遺族の社会的拒否」因子とともに「自死遺族に対する個人的情緒反応」因子が抽出されている。後者の因子は 7 つの形容詞対で構成されている。本研究では、自死遺族に対する態度の情緒的側面についてもより詳細に検討するため「自死遺族に対する個人的情緒反応」の形容詞対 7 項目を用いることとする。ただし、日本の大学生を対象とした調査では、自死遺族に対する情緒反応として、「暗い」、「こわい」、「つらそう」、「悲しいと思う」といった内容が見出されている（山中・田上, 2009）。そこで本研究では「暗い」「こわい」「つらい」「悲しい」という形容詞をもとに 4 つの形容詞対を新たに作成し、7 形容詞対に追加して自死遺族に対する態度の情緒的側面の測定をする。

方 法

質問紙の構成

配布した質問紙は、以下の 4 つから構成されていた。

フェイスシート 学部、学年、性別、年齢、家族を自殺で亡くした経験の有無について記入してもらった。

自死遺族に対する一般的態度 Reynolds &

Cimboic (1988-89) による項目から, 山中 (2010) が日本語に翻訳して用いた 5 項目である“精神的混乱の程度”, “好意の程度”, “死に対する責任の程度”, “接触時の緊張の程度”, “共感できる程度”を用いた。これらは, ある父親を亡くした男子大学生の架空事例について評定するものであり, それぞれ架空の男子大学生「〇さん」について尋ねる形式であった。本研究では事例について評定させるのではなく, 自死遺族一般について評定させるため, 原則「〇さん」という表記を「家族を自殺で亡くした人」に書き換えて用いた。“死に対する責任の程度”の項目については, 「父親」という表記の代わりに, 「自殺で亡くなった人」とした。これらの変更を加えて, 自死遺族に対する態度を評定する項目として, 以下の 5 項目に回答を求めた。

“精神的混乱の程度”は「家族を自殺で亡くした人はどの程度精神的に混乱していると思いますか?」として, 6 件法 (1. まったく混乱していない - 6. 非常に混乱している) で尋ねた。“好意の程度”は「もし家族を自殺で亡くした人と個人的に知りあう機会があったら, あなたはどの程度好意を持つと思いますか?」として, 6 件法 (1. まったく好意をもてない - 6. 非常に好意をもつ) で尋ねた。“死に対する責任の程度”は, 「自殺で亡くなったことについて, その亡くなった人の家族にはどの程度責任があると思いますか?」として, 6 件法 (1. まったく責任がない - 6. 非常に責任がある) で尋ねた。“接触時の緊張の程度”は, 「もし家族を自殺で亡くした人と会話する機会が今後あったら, あなたはどの程度緊張すると思いますか?」として, 6 件法 (1. まったく緊張しない - 6. 非常に緊張する) で尋ねた。最後に“共感できる程度”は, 「家族を自殺で亡くした人に対して, あなたはどの程度共感できますか?」として, 6 件法 (1. まったく共感できない - 6. 非常に共感できる) で尋ねた。

自死遺族に対する印象評定 自死遺族に対する態度の情緒的側面を検討するために, Calhoun et al. (1981) および Spence et al. (1984) の 7 形容詞対, 「強い - 弱い», 「親しみやすい - 親しみにくい», 「感じのよい - 感じのわるい», 「愉快的 - 不愉快的», 「リラックスした - 緊張した», 「良い - 悪い», 「深い - 浅い」に, 山中・田上 (2009) で見出された 4 形容詞「暗い», 「こわい», 「つらい», 「悲しい」をもとに作成した「明るい - 暗い», 「こわくない - こわい», 「うれしい - 悲しい», 「楽しい - 苦しい」という 4 形容詞対を加えた, SD 法による 11 項目について 7 件法で印象を評定してもらった。「どちらともいえない」を中間として, 各形容詞について「非常に」「かなり」「やや」の 3 段階を設定し, どちらかの形容詞にどの程度あてはまるかについて評定してもらった。教示として, 「以下の 11 個の形容詞対すべてについて, 家族を自殺で亡くした人に対して現時点であなたが感じる印象に最もよく当てはまる目盛のところに○をつけてください。」と記述した。

なお結果の分析に際して, 左の形容詞にある「非常に」から右の形容詞にある「非常に」まで, 順に 1 点から 7 点として得点化した。

自殺の容認の程度 独自に作成した「あなたは, 自殺という行為はどの程度認められるものだと思いますか?」という項目を用いて, 4 件法 (1. 自殺は容認できない - 4. 自殺は容認できる) で尋ねた。

タブー視の程度 Domino and Takahashi (1991) および張 (2006) に基づき, 独自に作成した, 「もしあなたが家族を自殺で亡くしたとしたら, その自殺という事実を友人や知人など周囲の人たちにどの程度知られたくないと思いますか?」という項目を用いて, 4 件法 (1. 知られたくない - 4. 知られてもよい) で尋ねた。

調査手続き

A 大学で開講されたある心理学関連科目に

出席していた学部学生 387 名（男性 249 名，女性 138 名，平均年齢 18.25 歳（ $SD=0.64$ ））に質問紙を一斉配布し，回答を依頼した。質問紙の表紙には，本調査の目的とともに調査対象者のプライバシーが守られること，研究目的以外に使用しないことを明記し，調査開始前に，調査者が同様の内容を口頭でも説明した。あわせて調査への参加は自由であり，途中で回答するのをやめなくなった場合はいつでも回答を中断して構わないことも口頭で説明した。さらに調査参加の有無や回答内容は，講義の評価とは一切無関係であることを説明した。

調査終了後には，調査への参加によって自死遺族に対する否定的態度が高まることがないよう，調査対象者全員に自死遺族に関する講義を実施した。講義の実施後，その場で質問紙を回収した。

結 果

分析対象

質問紙の回答に欠損値のあった者 17 名，および自死遺族である者 1 名を除いた A 大学学部学生 369 名（男性 236 名，女性 133 名，平均年齢 18.23 歳（ $SD=0.56$ ））を分析対象とした。

自殺の容認の程度の回答選択傾向

自殺の容認の程度を 4 件法で尋ねた。“1. 自殺は容認できない”と回答した者は 164 名（44.44%），“2. どちらかといえば自殺は容認できない”と回答した者は 128 名（34.69%），“3. どちらかといえば自殺は容認できる”と回答した者は 47 名（12.74%），“4. 自殺は容認できる”と回答した者は 30 名（8.13%）だった。

χ^2 検定を行ったところ，4 つの選択肢の回答者数が有意に異なっていた（ $\chi^2(3)=133.86$ ， $p<.01$ ）。ライアンの名義水準を用いた多重比較を行ったところ，“1. 自殺は容

認できない”の回答者数は，“3. どちらかといえば自殺は容認できる”および“4. 自殺は容認できる”の回答者数よりも有意に多かった（ $p<.01$ ）。また“2. どちらかといえば自殺は容認できない”の回答者数も，“3. どちらかといえば自殺は容認できる”および“4. 自殺は容認できる”の回答者数よりも有意に多かった（ $p<.01$ ）。

自殺のタブー視の程度の回答選択傾向

自殺のタブー視の程度を 4 件法で尋ねた。“1. 知られたくない”と回答した者は 165 名（44.72%），“2. どちらかといえば知られたくない”と回答した者は 132 名（35.77%），“3. どちらかといえば知られてもよい”と回答した者は 31 名（8.40%），“4. 知られてもよい”と回答した者は 41 名（11.11%）だった。

χ^2 検定を行ったところ，4 つの選択肢の回答者数が有意に異なっていた（ $\chi^2(3)=143.64$ ， $p<.01$ ）。ライアンの名義水準を用いた多重比較を行ったところ，“1. 知られたくない”の回答者数は，“3. どちらかといえば知られてもよい”および“4. 知られてもよい”の回答者数よりも有意に多かった（ $p<.01$ ）。また“2. どちらかといえば知られたくない”の回答者数も，“3. どちらかといえば知られてもよい”および“4. 知られてもよい”の回答者数よりも有意に多かった（ $p<.01$ ）。

群の設定

自殺の容認の程度について，“3. どちらかといえば自殺は容認できる”，または“4. 自殺は容認できる”と回答した者は，自殺容認群とした（ $n=77$ ）。一方“2. どちらかといえば自殺は容認できない”，または“1. 自殺は容認できない”と回答した者は，自殺非容認群とした（ $n=292$ ）。

次にタブー視の程度について，“4. 知られてもよい”，または“3. どちらかといえば知られてもよい”と回答した者は，非タブー視

Table 1 自死遺族に対する態度の平均 (SD)

態度	タブー視の程度	容認の程度	
		容認	非容認
精神的混乱	タブー視	5.41 (0.58)	5.54 (0.74)
	非タブー視	5.26 (0.82)	5.39 (0.86)
好意	タブー視	3.48 (0.96)	3.26 (0.81)
	非タブー視	3.87 (1.12)	3.54 (0.90)
死に対する責任	タブー視	3.80 (0.88)	3.92 (0.92)
	非タブー視	3.03 (1.47)	3.68 (1.17)
接触時の緊張	タブー視	3.59 (1.42)	4.13 (1.22)
	非タブー視	2.26 (1.53)	3.68 (1.29)
共感	タブー視	3.26 (1.08)	3.02 (1.18)
	非タブー視	3.03 (1.17)	2.88 (1.25)

群とした ($n=72$)。一方“2. どちらかといえば知られたくない”, または“1. 知られたくない”と回答した者は, タブー視群とした ($n=297$)。

なお, 自殺容認・非タブー視群は 31 名 (8.40%), 自殺容認・タブー視群は 46 名 (12.47%), 自殺非容認・非タブー視群は 41 名 (11.11%), 自殺非容認・タブー視群は 251 名 (68.02%) となった。

自死遺族に対する一般的態度の群間比較

自死遺族に対する態度の 5 項目の平均評定値と SD を Table1 に示した。

自死遺族に対する態度の 5 項目に関して, 自殺容認の程度 (対象者間: 容認, 非容認) × タブー視の程度 (対象者間: タブー視, 非タブー視) の 2 要因分散分析を行った。

“好意の程度”において自殺容認の程度 ($F(1, 365) = 4.97, p < .05$), およびタブー視の程度 ($F(1, 365) = 7.29, p < .01$) の主効果が有意だった。各要因において平均評定値を比較したところ, 非容認 < 容認, タブー視 < 非タブー視だった。

“死に対する責任の程度”においては交互作用が有意な傾向だった ($F(1, 365) = 3.51,$

$p < .10$)。単純主効果の検定の結果, タブー視における容認の程度の主効果 ($F(1, 365) = 7.45, p < .10$), および容認におけるタブー視の程度の主効果 ($F(1, 365) = 11.00, p < .10$) が有意であった。平均評定値を比較したところ, タブー視群では容認 < 非容認で, 容認群では非タブー視 < タブー視だった。

“緊張の程度”においては交互作用が有意だった ($F(1, 365) = 5.68, p < .05$)。単純主効果の検定の結果, タブー視における容認の程度の主効果 ($F(1, 365) = 6.96, p < .05$), 非タブー視における容認の程度の主効果 ($F(1, 365) = 21.64, p < .05$), 非容認におけるタブー視の程度の主効果 ($F(1, 365) = 4.28, p < .05$), 容認におけるタブー視の程度の主効果 ($F(1, 365) = 19.74, p < .05$) が有意だった。平均評定値を比較したところ, タブー視群でも非タブー視群でも容認 < 非容認で, 容認群でも非容認群でも非タブー視 < タブー視だった。

自死遺族に対する印象評定の尺度構成

自死遺族に対する印象評定 11 項目について, 全データを用いて因子分析 (重みづけの

Table 2 自死遺族に対する印象評定 11 項目に関する因子分析の結果

項 目	因子負荷量
因子 1：推測された遺族の苦痛感情	
10 悲しい－うれしい（逆転）	.88
11 楽しい－苦しい	.87
7 浅い－深い	.37
因子 2：遺族に向けられるネガティブ感情	
5 感じのわるい－感じのよい（逆転）	.60
3 親しみやすい－親しみにくい	.55
4 こわくない－こわい	.54
5 悪い－良い（逆転）	.47
6 愉快的な－不愉快的な	.45
因子間相関	1 2
因子 1：推測された遺族の苦痛感情	.40
因子 2：遺族に向けられるネガティブ感情	.40

Table 3 推測された遺族感情および遺族に向けられるネガティブ感情の平均評定値 (SD)

感情	タブー視の程度	容認の程度	
		容認	非容認
推測された遺族の苦痛感情	タブー視	4.91 (0.81)	5.28 (0.90)
	非タブー視	4.91 (1.03)	5.16 (0.88)
遺族に向けられる ネガティブ感情	タブー視	4.27 (0.76)	4.34 (0.63)
	非タブー視	3.90 (0.59)	4.07 (0.70)

ない最小二乗法，直接オブリミン回転）を行った。因子数は，固有値 1 以上の基準を設定して決定した。因子負荷量が .35 未満の項目および複数の因子において因子負荷量が .35 以上の項目は削除し，再度因子分析を行った。その際重みづけのない最小二乗法を用いて因子を抽出し，因子数は固有値 1 以上の基準を設け，最終的に 2 因子とした (Table2 参照)。

第 1 因子は「7. 深い－浅い」，「10. うれしい－悲しい」，「11. 楽しい－苦しい」の 3 形容詞対に負荷が高く，項目から自死遺族が感じている苦痛な感情を推測している内容であったため，「推測された遺族の苦痛感情」因子とした。また第 2 因子は，「3. 親しみやすい－親しみにくい」，「4. こわくない－こわ

い」，「5. 感じのよい－感じのわるい」，「6. 愉快的な－不愉快的な」，「9. 良い－悪い」の 5 形容詞対に負荷が高く，項目から自死遺族に対して感じる否定的な感情の内容であったため，「遺族に向けられるネガティブ感情」因子とした。なお，各因子の Cronbach の α 係数は，第 1 因子が .73，第 2 因子が .65 であり，内的整合性は許容範囲と判断した。各因子に含まれる項目の素点を合計し，項目数で除した値を下位尺度得点として分析に用いた。

自死遺族に対する印象評定の群間比較

2 つの下位尺度の平均得点と標準偏差を Table3 に示した。

群間比較を行った結果，「推測された遺族の苦痛感情」においては，自殺容認の程度の主効果が有意だった ($F(1, 365) = 5.91, p <$

.05)。平均評定値を比較したところ、容認＜非容認だった。また「遺族に対するネガティブ感情」においては、タブー視の程度の主効果が有意だった ($F(3, 365) = 11.34, p < .01$)。平均評定値を比較したところ、非タブー視＜タブー視だった。

考 察

本研究では大学生を対象に、自殺の容認とタブー視という自殺観の2側面が、自死遺族に対する態度にどのような影響を及ぼすのか検討した。

自殺の容認の程度及びタブー視の程度の回答選択傾向を確認したところ、自殺は容認できないという者の割合が高く、自殺をタブー視する者の割合が高いことが明らかとなった。このことから、日本では自殺を容認・称賛するような傾向は少なくとも現在では認められないものの、タブー視の傾向は高いことが示された。ただし、自殺を容認せず、かつタブー視傾向が高い者に比べてかなり少ないものの、張(2006)の言う自殺観の二面性をもつ者が一定数存在することは明らかとなった。

さらに、自殺の容認の程度とタブー視の程度が自死遺族に対する態度に及ぼす影響について、特徴が見いだされた。

まず自殺を容認する傾向が高い場合、自死遺族に対する好意は高く、自死遺族がそれほど苦痛を感じていないと認識していることが明らかとなった。また自殺の事実を隠す傾向が高い場合、自死遺族に対する好意は低く、自死遺族に対してより強いネガティブ感情を向けることが明らかとなった。

なお、一般的態度の中で“死に対する責任の程度”と“緊張の程度”に関しては、交互作用が示された。“死に対する責任の程度”に関しては、タブー視における非容認の主効果、非容認におけるタブー視の主効果が明らかとなった。すなわち、家族を自殺で亡くし

てもそのことを隠さない傾向にある場合には、自殺を容認しない者の方が容認する者よりも、自死遺族に死の責任を求める傾向が高かった。また、自殺を容認する傾向がある場合には、自殺の事実を隠す傾向がある者の方がそうでない者よりも、自死遺族に死の責任を求める傾向が高かった。このことから、たとえ自殺を容認していてもタブー視する傾向が高かったり、タブー視しない傾向にあっても自殺を容認しない場合は、自死遺族に責任を求めてしまうことが示された。また“緊張の程度”に関しては、タブー視および非タブー視における容認の単純主効果と非容認および容認におけるタブー視の単純主効果が明らかとなった。すなわち、自殺を容認しない傾向か、タブー視する傾向か、少なくともどちらかの傾向がある者は、自死遺族と接する際に緊張する程度が高くなるといえる。

このようにまず自殺のタブー視の傾向は、自殺実態の把握を遅らせるだけでなく、自死遺族に対する強い偏見につながる可能性があり、社会における自殺のタブー化をいかに改善するかが、自死遺族に対する偏見を解消するための重要課題であるといえる。一方自殺容認・称賛の傾向は、張(2006)によれば、自殺予防を消極的にしてしまう危険性をはらんでいるとされているが、本研究で明らかになったように、逆に自殺の非容認の傾向が高まってしまうと、自死遺族に対する否定的態度が高まることにもなる。このジレンマをいかに解消するかが、総合的な自殺対策を考えるにあたり、重要になるのではないかと考えられる。自殺を容認しないという態度は、積極的な自殺防止につながると考えられるが、「自殺は防ぐべきもの」「自殺をやめさせなくてはいけない」といった思いが強くなりすぎると、「身近にいた家族がなぜ防ぐことができなかったのか」といった自死遺族に対する強い批判になってしまう危険性を孕んでいる。自殺は絶対に認められないと一義的に考える

のではなく、自殺で亡くなる人を一人でも減らすのが望ましいが、どうしても防ぐのが難しい自殺が多くあるのも事実であることを周知していくこと（藤井，2009）が、ジレンマを解消していく第一歩になるのではないかと考えられる。

三輪（2011）が指摘しているように、自死遺族支援においては、遺族一人一人に直接かわるようなミクロ的支援だけでなく、遺族を取り巻く環境に働くメゾ的、マクロ的な支援も重要な支援となるといえる。メゾ的支援とは遺族を見守り、遺族の語りを聴く聴き手を育成していくことを指しており、マクロ的支援とは自殺に対する偏見を解消するために社会に働きかけていくような活動を指している。これら 3 つの次元の支援が有機的に連動して機能することが重要であると考えられる。本研究は、これら 3 つの次元の中でも特にマクロ的な支援につながる知見を提供できたのではないかと考えられる。

ただし本研究には、いくつか限界と課題がある。

第一に、張（2006）の指摘した自殺観の二面性の傾向、すなわち自殺を容認・称賛するがタブー視する傾向をもつ者が一定数いることは示されたものの、割合として決して多い人数ではなかった。そうした二面性が我が国の文化的特徴であるかどうかについては、さらに他の文化圏でも同様のデータを収集して詳細に比較検討する必要がある。

第二に、本研究の参加者は大学生のみであった。自死遺族は所属するコミュニティにおいて、当然ながら大学生だけでなく、様々な年代、役割を担った人々と接触することになる。本研究では大学生のみ対象にしているため、大学生ではない年代や立場の人々にも果たして同様の傾向がみられるかどうかについては定かではない。本研究で得られた知見を自死遺族への支援に生かしていくためには、今後さまざまな属性の人達の態度についても

検討していく必要があるだろう。

以上のような課題について検討していくことで、今後自死遺族に対する偏見解消に向けたより効果的な啓発プログラムを開発することが可能となり、我が国の自殺対策をより包括的なものとするができるであろう。

引用文献

- Calhoun, L. G., & Allen, B. G. (1991). Social reactions to the survivor of a suicide in the family: A review of the literature. *Omega: Journal of Death and Dying*, 23, 95-107.
- Calhoun, L. G., Selby, J. W., & Faulstich, M. E. (1980). Reactions to the parents of the child suicide: A study of social impressions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 48, 535-536.
- Calhoun, L. G., Selby, J. W., Tedeschi, R. G., & Davis, B. (1981). The aftermath of suicide: An instrument for measuring reactions to the surviving family. *Journal of Psychiatric Treatment and Evaluation*, 3, 99-103.
- Calhoun, Selby, Tedeschi & Davis (1981);
- Calhoun, L. G., Selby, J. W., & Walton, P. B. (1986). Suicidal death of a spouse: the social perception of the survivor. *Omega: Journal of Death and Dying*, 16, 283-288.
- 張賢徳（2006）. 人はなぜ自殺するのか — 心理学的剖検調査から見えてくるもの — 勉誠出版
- Cvinar, J. G. (2005). Do suicide survivors suffer social stigma: A review of the literature. *Perspectives in Psychiatric Care*, 41, 14-21.
- Doka, K. J. (2002). How we die: Stigmatized death and disenfranchised grief. In K. J. Doka (Ed.), *Disenfranchised grief: New directions, challenges and strategies for practice* (pp.323-336). Illinois: Research Press.
- Domino, G., & Takahashi, Y (1991). Attitude toward suicide in Japanese and American medical students. *Suicide and Life-Threatening Behavior*, 21, 345-359.
- 藤井忠幸（2009）. 自死遺族の受難 — 「二次的被害」についての考察 現代のエスプリ, 501, 41-49.
- 自殺実態解析プロジェクトチーム（2008） 自殺実態白書 2008 第二版
- Jordan, J. R (2001). Is suicide bereavement different? A reassessment of the literature. *Suicide and Life-Threatening Behaviour*, 31, 91-102.

- 厚生労働省 (2017). 平成 29 年版自殺対策白書 日経印刷
- 三輪久美子 (2011). 悲嘆プロセス研究にみる故人との絆：自死遺族支援のための手がかりとして自殺予防と危機介入, 31, 18-24.
- Pinget, M (1984). *La mort volontaire au Japon*. Paris: Gallimard.
- (バンゲ M. 竹内信夫 (訳) (2011). 自死の日本史 講談社)
- Reynolds, F. M. T., & Cimbalic, P. (1988-89). Attitudes toward suicide survivors as a function of survivors' relationship to the victim. *Omega: Journal of Death and Dying*, 19, 125-133.
- Rudestam, K. E. (1987). Public perception of suicide survivors. In E. J. Dunne, J. L. McIntosh, & K. Dunne-Maxim (Eds.), *Suicide and its aftermath: Understanding and counseling the survivors* (pp.31-44). New York: W. W. Norton & Co.
- Spence, N. D., Goldney, R. D., & Moffitt, P. F. (1984). Factorial structure of the aftermath of suicide instrument. *Journal of Clinical Psychology*, 40, 1426-1430.
- 山中亮 (2010). 自殺で親を亡くした大学生に対する態度の検討：大学生を対象として 自殺予防と危機介入, 30, 63-68.
- 山中亮・田上恭子 (2009). 自死遺族に対する大学生の態度に関する探索的研究 — KJ 法による分析 — 臨床心理学, 9, 382-387.

付 記

本論文は日本心理学会第 79 回大会において発表した内容を加筆修正したものである。